

# 歴史を心に刻み、絶対に侵略戦争を再び起こしてはならない

## — 上海における日本軍の暴行概略 —

陳賢明 上海淞廬抗戦紀念館館長

本日ご臨席の皆様、こんにちは。私は「上海淞廬抗戦紀念館」から来ました陳賢明と申します。今日私はここで 66 年前、日本軍が上海に侵略して、そこで犯した罪についてお話したいと思えます。

【編者注記 講演は配布資料の原稿に沿ってなされました。尚、時間の都合で一部は講演から割愛されました。以下、配布原稿全文を転載します。】

1932年1月28日と1937年8月13日、日本軍国主義者は上海に対し2度にわたる淞廬戦争を發動した。

2度にわたる淞廬戦争において、日本軍は上海とその周辺地域において狂気じみた爆撃、強姦殺戮、野蛮な略奪といった天を覆うばかりの大罪を犯し、我が上海人民を塗炭の苦しみに陥れ、多くの無辜の民を死に追いやった。どれ程多くの幸福な家庭が破壊され、一家離散と生涯にわたる苦渋を舐めさせられたことであろう。また、どれ程多くの物質的かつ精神的な財産が侵略戦争の砲火の中に消え失せたことであろう。その中には今では既に回復不可能なものさえあるのだ。さらにどれ程多くの人々が、生涯において最も貴重な青春を奪いとられ、未来を奪われ、彼（彼女）らが今後開花させるであろう天賦と才能をつみ取られてしまったことであろう。数十万に及ぶ優秀な中華の子供たちが祖国のために身を捧げ、その屍を異境の地に晒してきたことか。そしてどれ程多くの人々がそれらの被害故に、長期にわたって精神的傷害と苛みを受け続けてきたことか。

狂気じみた爆撃、見境のない放火と殺戮、強姦略奪はファシストどもの本質を表すものである。ドイツのファシストもそうであったように、日本のファシストもまたそうであった。極東軍事法廷において、日本戦犯に対する判決書の中にこういった下りがある：「およそ戦争に参加したことのある軍人は、一つ一つ調査すれば、まずすべての者が強盗、強姦を犯したことのある犯人である」。これは日本による中国侵略の過程で行われた事実から導き出されたまったく正確な結論と言えよう。侵略日本軍が2度にわたる淞廬戦争で上海を占領した後に行った数々の暴行の事実は、正に山のごとく動かし難い事実であって、我が上海人民はこの血と涙によって綴られた屈辱の歴史を決して忘れることはない。

## 爆撃による民家の焼却

爆撃と放火は、日本軍による侵略戦争の中で最も猛威をふるった手段であった。これによって侵略された人民の反抗心を打ち砕こうとしたのである。2度にわたる淞瀘戦争において、中国軍が頑強に抵抗したために日本軍は一時目的を果たすことが出来ず、もとより軍事施設でもない工場、商店、学校、病院、民家や人口の密集する地域に対し野蛮な爆撃を行った。

「1.18」（1932年）淞瀘戦争が始まるやいなや、日本軍は先ず天通庵駅を占領し、戦車や装甲車の援護の下で、虹口各路から閘北に向かって全面侵攻を開始した。中国の連隊は劣勢な装備から複雑な地形を隠れ蓑にして奮闘し、日本軍を退却させた。その後、日本軍は大量の爆撃機を動員し、閘北に対し爆撃を行った。1932年1月29日の早朝4時40分、航空母艦「能登呂」から飛び立った爆撃機は小雨が降る霧の中をつき、閘北上空を低空飛行しながら重量爆弾と強力な焼夷弾を降らせた。閘北に密集していた各地の商店、民家、工場、学校が次々と被弾、炎上していった。一時、その火炎は天を覆い、硝煙が日差しを遮った。閘北全体が火の海に包まれた。この爆撃は10時間余り続き、その主要な目標は我が国の文化機構、施設と華商系の企業、工場であった。その後再び虹口、呉淞、真如などに対し爆撃と砲撃を行った。これによって上述地域は一面の焦土と化した。経済、文化、交通など重要な施設はほとんど破壊尽くされたのである。

「8.13」淞瀘戦争において、日本の爆撃機は上海に対し、さらに熾烈な爆撃を行った。1937年8月18日、日本軍指令部は天皇の下問に対し、こう答えている：「もっかの重点は上海を確保することであり、十分な兵力をもって上海における重大な戦果を迅速に確保することによって各国の干渉を防止し、経済の要を破壊する。大規模な空爆によって中国の志気を消耗させる等の上で、多大な成果を生んでいる」。

同時に、参謀本部も空軍の上海方面での作戦参加に積極的な態度を示し、「海軍の強大な空襲によって成果を生むことを期待する」とした。9月下旬に至って、日本軍が上海戦場で動員した飛行機は200機に達し、上海の制空権は完全に日本軍の手中に握られた。

日本機は地上部隊の侵攻と歩調を合わせ、先ず狂気じみた空爆を行い、戦区の一の建物を破壊し、中国軍が隠れるところを無くした後に、集中砲火に援護された歩兵が前進した。これと同時に、日本軍はさらに上海及びその周辺地域の工場、学校、家屋建築物



や橋梁、道路などに対し集中爆撃を行った。手に寸鉄も帯びない難民すら見逃さなかった。日本機による無差別爆撃によって、上海人民の生命財産は尽く奪われていったのである。

2度にわたる淞瀘戦争で、我が記念館の所在地である宝山地区は主戦場であった。戦争が始つて以来、日本軍は我が非戦闘性の建物や民家に対し無差別爆撃を行い、一帯を焼き尽くし、宝山城は一面の廢墟となった。その惨状は《淞瀘戦事統計》という書物によると、「1.28」事変において上海北区の江湾、呉淞、殷行、彭浦等における家屋資産の損失は1074.98万元、家屋損失20117万元で、宝山県の城廂、楊行、大場での家屋資産の88.88万元、家屋損失0.13万元、江湾一帯での家屋焼失、被爆は7539軒に達する。

「8.13」事変後、日本軍は大量の飛行機を動員し、宝山城の市街や農村の非軍事目標に対し無差別爆撃を行った。日本機の行くところ一面の廢墟となり、一帯は日本軍の占領するところとなった。また日本軍の行くところ、至る所で略奪、放火が起り、宝山城一帯で非人道的な殲滅を行った。汪精衛偽上海特別市宝山区政務署による蕪藻浜以北の各村における不完全な統計によつても、民家の損壊は8.77万間、元あった家屋の81.42%に相当するものであった。価値にして16134.73万元である。その内、羅店鎮区における元あった家屋12573間の内、12009間が破損した。実に95%にあたる比率であった。またこれとは別に1999年に行われた蕪藻浜以南地区の淞南、廟行、高境、大場、彭浦、五角場等での調査によると、不完全な統計によつても、日本軍による2度の淞瀘戦争中に焼失した民家は1.5万間に達している。その内、大場鎮の長さ500メートルに及ぶ町並みが完全に焼失し、黒い帯のような焦土と化した。

### 無辜の民に対する虐殺

中国を侵略した日本軍は人類史上において最も残忍な虐殺手段を用い、最も凶暴で、最も野蛮な、恐怖に満ちた虐殺を行い、中国人民の抵抗意志を挫き、従順に彼らの支配を受け入れさせようと企てた。

2度にわたる淞瀘戦争において、日本軍がいるところ、上海の無辜の民と財産に対し、殺戮、放火、略奪を行い、その強盗としての本性を余すところなく発揮した。日本軍が我が同胞に対する虐殺手段は極めて残酷で、銃殺、刺殺、斬殺、焼き殺す、水殺、首切り、腹を割く、生き埋めなど、その方法は百近くに及ぶ残忍非道な方法が採られた。不完全な統計ではあるが、「8.13」戦争中に限つても、宝山全县で日本軍に虐殺された住民は11233人に達した。その内、男が6527人、女が4706人である。年齢別に見ると老年層が4700人、青壮年層が3947人、子供が2580人であった。病死や餓死を含めるならば23万人の無辜の民が戦禍の中で命を落とした。この数は全县人口の19.27%にあたる人数である。

1999年、宝山区史(弁)公室は全区の各郷鎮について調査を行った。その内の42件の重大な惨案(虐殺事件)について、宝山区司法局公証処が司法調査を行った。これら惨案はみな前代未聞、心を凍らせるものばかりであった。

1932年2月20日、日本軍は道を歩いていた高境村の賀王宅など農民とセメント工18人を捕らえ、強制的に彼らに軍需物資の運搬をさせた。夜になって、日本軍はこれら18人を湯家橋の河原に連行して銃殺にした。その内一人だけ逃げ出すことができた。旧暦の1月15日、日本軍は淞南郷小沈家宅で避難し損ねた老人6人を捕らえた。その内の高杏生は“聾哑者”であった。彼はその場で射殺され、他の沈龍龍など5人は日本軍に沈雲生の家の前にある“肥溜め”まで連行され、一人一人生きてまま中に入れられて溺死させられた。3月2日、日本軍が大場を占領した後、大張家宅で18人の一般民を集団虐殺した。

「8.13」 事変後、日本軍は宝山地区でも惨案を起こしている。その数はさらに多く、手段も更に残酷になっている。1937年8月23日(旧暦の7月18日)日本軍は羅涇小川沙等から上陸した。一路焼く、殺す、奪うをくり返した。最初にその洗礼を受けた羅涇人民は、100日足らずの間に2244人が日本軍によって殺害されている。郷民総数の80%にあたる数字である。平均毎日20人余りが殺されたことになる。その他の占領区においても日本軍は同じように無辜の民衆を虐殺している。羅店争奪戦においても800人余りが殺され、趙家巷一カ所だけでも104人の村民が殺されている。楊行田都宅でも62人が射殺、斬殺されている。また、石家堰でも200余りを虐殺している。月浦大徐家宅では機関銃で41人が射殺され、徐正南の一家16人が全員殺害されている。大場鎮を攻略したときも日本軍は一般民440人を殺害した。日本軍の残忍さに、今だ人々は激しい憤りを覚えている。

「1.28」、「8.13」の2度の淞滬戦争期間において宝山地区以外の上海の他の地域でも大規模な虐殺が行われている。その罪行は累々たるものである。

「1.28」戦争勃発後の翌日、日本軍は虹口で「便衣隊の処分」を名目に、一回で300人余りを殺害した。同年3月2日、日本軍が真如鎮を占領したとき、青壮年男子数十人を捕らえ、十九路軍の残兵と見なして尽く殺害した。また民家の中から十九路軍の遺物が見つかったという理由だけで40人余りが射殺されている。3月3日、日本軍は龍河新涇の東岸から進入し嘉定までの道すがら、面白半分に殺戮をくり返した。毛家宅で徐湯雲を射殺し、吉家宅で吉錫全、高家宅では貳和的を射殺した。徐行鎮に入ってから単殿笙、楊阿二、陸充元、張鶴華を射殺、斜涇村では避難し損ねた27人の村民を集団で射殺し、全村の約半数にあたる、民家26間を焼き払った。

悪行の限りを尽くす日本軍は難民さえ見逃さなかった。「1.28」戦争が勃発後、閘北の東北辺境の数万人が西の辺境に向かって避難していた。ある日、日本機が北南林上空からこの一団の避難民を見つけ、獣の如き感情がわき上がり、この一団に向かって爆撃、掃射をくり返した。こうした無辜の難民を殺害する事案は数多くあった。閘北辺境に設けられていた難民収容所には万を超える避難民がいた。1月30日から日本機は毎日空爆をくり返し、数日せぬ間に収容所の建物は完全に破壊された。日本機が来るたびに、避難民は大混乱に陥り、悲鳴を上げながら逃げまどった。凶悪な日本機は機関銃でこうして逃げまどう避難民に向かって機銃掃射をくり返した。哀れな避難民は逃げまどいながら次々と命を落としていったのである。

「8.13」戦争時期、日本軍の暴行は更にエスカレートしていった。彼らは人を見れば殺し、財を見れば奪った。こうして数多くの惨案を作り出していった。例えば、1937年8月23日、240人の難民が源昌路を通過していたとき、日本軍がその中から100人の青壯年を連れ出して殺害した。同日、日本軍は百老路で難民300人余りを拘留し、その中から青壯年を引き出して殺害した。8月29日の午後2時、今懷徳路埠頭で民衆1000人余りを数人ずつを一まとめにして縛り、黄浦江に投げ込んで溺死させた。同年11月上旬、日本軍が金山衛沿岸から上陸した後、兵を分けて北に向かって前進し、沿道で放火、殺戮をくり返した。金衛の朱海、両門の2つの村で、日本軍は民衆を追い立て、ある者は河に投げ込まれ、ある者は火の中に投げ込まれた。こうして溺死、焼死させられた無辜の民は71人に及んだ。焼かれた家屋は94間であった。日本軍が上陸した最初の3日間で、金山地区で殺された民衆は1015人に達し、焼かれた家屋は3059間に達する。

陥落後、日本軍は度々重大な惨案を作り出している。28日間にわたる楊樹浦の大封鎖、15日間にわたる普陀区薬水弄の大封鎖、半月間にわたる青浦県青東での大虐殺、この虐殺では、被害を受けた村落は224カ所、殺害された者は915人、焼かれた家屋は2287間に及ぶ。松江県涇涇鎮での大虐殺では一日の内に500人余りが殺害され、4000間あまりの家屋が焼かれた。金山県の山陽鎮の騒擾事件では、351人が殺害され、拉致されて行方不明になった者が58人、焼かれた家屋1146間、焼かれた牛車棚445個、殺された耕作牛708頭、豚441頭、それに大量の稲や綿花が完全に焼き払われた。崇明県の堅河鎮での大殺戮では、二日間で被害者が20人余り、破壊された商店が100余り、焼かれた家屋は1400間に達する。

### 陵辱される婦女と児童

強姦は日本軍将兵の獣じみた訓練の一つでもあった。人間性を麻痺させる為である。目的は彼らを侵略戦争にあつて砲灰に帰すことにあつた。

2度にわたる淞瀘戦争で、上海の婦女、児童は更に凄惨な蹂躪を受けている。宝山区を例に挙げると、解放前の不完全な統計によっても宝山の蕪藻浜以北地区に限って、日本軍によって強姦、蹂躪された婦女は1672人に達している。

日本軍による婦女子に対する強姦、蹂躪、児童や胎児に対する斬殺暴行は上海各区県全域に及び、その残忍さは顔を覆うばかりであつた。強姦された婦女子は10才前後の少女から、7、80才の老婆に及んでいる。多くの婦女子は強姦、輪姦された後、殺害されている。ある者は乳房を切り取られ、ある者は首を切り落とされ、ある者は強姦された後、お腹を切り裂かれ、胎児を引き出された者さえあつた。更におぞましいのは、赤ちゃんに対する惨殺である。彼らはただ快樂のために赤ちゃんを湯の中で煮たり、逆さにして水田にさし込んだり、投げつけて殺し（これを競争したことさえある）、両足をもって引き裂く、刺し殺す、赤ちゃんを銃剣に刺したまま街の中を練り歩く者さえいた。日本軍のこうした獣にも勝る残忍さは、到底許されるものではない。

上海陥落後、日本軍の獣にも勝る行いは一層エスカレートしていった。日本軍による暴行から



逃れるために多くの女性たちは顔に釜の墨を塗りつけ、襤褸をまとい、まるでお化けのような格好をつくらせた。ある者は髪を丸坊主に剃り、男装する者もいた。それでも日本軍に見つかれば逃げられるものではなく、ついには強姦、殺戮の憂き目にあった。

これ以外にも、日本軍の上層部は上海の各地に多くの「慰安所」を作った。女性を略奪して性の慰みものとして、性奴隷にしたのである。現在分かっているだけで、上海北郊外と宝山地区一帯だけで、こうした慰安所が14カ所あった。この数字だけでも、日本軍の凶悪、野蛮ぶりが分かるというものである。

#### 工場、商店に対する破壊

・・・略・・・

#### 教育（文化）事業に対する破壊

・・・略・・・

#### 軍事施設の建設（民有地の強制撤去と労役強要）

・・・略・・・

以上述べた事実から、「1.28」、「8.13」の2度にわたる淞滬戦争が、上海人民にとっては侵略と奴隸的使役という悲惨な歴史であったことが分かる。この血と涙で綴られた歴史は、中国全土で繰り広げられた日本軍による暴行の縮図に他ならない。それは日本軍の侵略戦争を遂行する過程での残酷性、略奪性、破壊性を十分に示している。しかし、ここ数年、日本国内の右翼勢力はこうした侵略戦争の罪悪を必死になって隠し、歪曲しようとしている。再び軍国主義の亡霊を蘇らせる為に中国侵略を否定し、数々の暴行をさえも否定しようとして企んでいるのである。我々はこれを座視することはできない。我々は日本軍国主義が行った数々の罪行をすべて明らかにし、これを忘却することなく、歴史にはっきりと刻みつけなければならない。今日、私が上海における日本軍の暴行について語るのも、人々の良識を喚起し、二度と再びこうした侵略戦争が起こらないことを願ってのことである。